

# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

163 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号  
新宿三井ビル37F  
Phone: 03-3344-1701~3  
Fax: 03-3342-6911

January 1992

# No.59

- 2 フィランソロピーの日本的特徴とは？
- 3 「在日福州地区華僑(華人)の中日文化交流への貢献」について
- 4 環境をめぐる2つの報告会を開催
- 5 自然の重要性を改めて認識
- 6 助成財団資料センターの最近の活動から
- 7 新刊紹介
- 8 最近の報告書から

## 昨年秋に3つの報告会を開催

トヨタ財団では昨年11月、3つの報告会を開催した。

先ず、11月16日には「身近な環境をみつめよう」トヨタ財団研究コンクールの10年とこれから」と題したシンポジウムをお茶の水スクエア（東京・神田）にて開催。第3回特別賞を受賞した都市鳥研究会・代表の唐沢孝一氏による基調報告の他、同コンクールの選考委員と第4回および5回最優秀賞受賞グループの代表者による討論などが行われた。（P. 4 参照）

また、同28～29日にかけては1990年度助成の第Ⅲ種研究を中心とした研究経過報告会を新宿三井ビル会議室（東京・新宿）にて行った。

一方、同12日には（財）旭硝子財団と共催にて「アースウォッチ・セミナー」を国際文化会館（東京・六本木）にて開催。アースウォッチの活動に関する報告とこれに伴う活発な質疑応答が行われた。（P. 4 参照）

### ■1991年度市民活動助成（第2期）に60件の応募

昨年10月15日より行っていた本助成の第2期に関する公募については、同12月15日をもって締め切った。その結果、総数では前期（47件）を上回る申請が寄せられたが、一方で、助成予定総額（1,500万円）が前期より少ないため、採択率はかなり厳しいものとなりそう。

選考は、この2月から3月にかけて行われ、3月中旬には助成の対象が決定される運びとなっている。

### ■第6回市民研究コンクールには65件の応募

“身近な環境をみつめよう”をテーマに、「市民研究コンクール」として再開した6回目の当コンクールの公募（昨年10月15日より開始）は、この1月15日をもって締め切った。

選考は1月から3月にかけて行われ、3月中旬には予備研究の助成対象が決定される予定となっている。

### 「東南アジア理解週間」を開催

昨年10月9～13日にかけては、（財）豊田市国際交流協会とともに「東南アジア理解週間」と題した複合イベントを愛知県豊田市の豊田産業文化センターにて開催した。

会期中は、当財団の“隣人をよく知ろう”プログラム・翻訳出版促進助成による刊行物を主体とした「東南アジア書籍展」や「東南アジア世界への誘い—文学を通して知るその心—」をテーマとした国際シンポジウムの開催など様々な催しが行われ、多数の人々が参加した。

▼シンポジウムのひとコマ



## フィランソロピーの日本的特徴とは？

山岡義典 プログラム・ディレクター

### ●世界が日本のフィランソロピーを見つめ始めてきた

ODA（政府開発援助）だけでなく、NGOをはじめとする民間組織による援助に対しても世界からの期待が強まるにつれ、日本社会における援助行動の特殊性への関心が、海外でも高まっている。さらにここ数年、企業フィランソロピーとか企業メセナとかコーポレート・シチズンシップなどが国内の産業界で声高に語られはじめたこともあって、その関心はますます高まってきているように見受けられる。最近とみに外国の人から質問を受けることも増えてきた。

日本のフィランソロピーが欧米のそれに比べてかなり低い水準にあることは、さまざまな状況証拠が語っている。その低さは何に由来するのか。その背景にはどのような思想的特殊性があるのか。ここでは日本のフィランソロピー観とも言うべきものについて、私見を整理してみたい。

### ●日本の伝統的なフィランソロピー観とは

まず結論を言えば、現代の日本のフィランソロピーが不振なのは、そのような思想や行為が日本の伝統になかったからではない。考えも行為も大いにあったのだ。問題は、その伝統的なものが日本人の心の奥底に根強く定着し、近代的な地球社会的な発想や行動規範に馴染みにくくしているためだと思うのである。以下、それについて触れる。

#### [互助の思想]

人間同士がお互いに助け合うのが相互扶助すなわち「互助」である。日本の互助精神は決して他の社会に劣るものではないが、その助ける範囲が何らかの「縁」によって結ばれた仲間内に限られる点に大きな特徴がある。その仲間内とは、最も典型的には家族や親族、少し広がって村や町内、江戸時代では藩、現代では企業などで、広い意味での「ムラ社会」と言ってよい。

そのムラ社会では、誰かが救済を必要とすれば、そのムラの中で処理しなければならない。他のムラの誰かに助けを求めることは、そのムラにとっては恥になるし、他のムラの成員が勝手に他のムラの成員を救済することは、僭越で失礼にあたる。それぞれのムラがそれぞれのムラの中で助け合い、他のムラには手を出さない。これが、日本の伝統的な相互扶助＝互助の精神である。しかしこのような考えの中では、「不特定多数のための利益」や「人類一般への貢献」といった発想は育ちにくい。

慈善や篤志の輪が次々に広がっていく、ということにはなりにくい。「閉ざされたフィランソロピー」とも言うことができよう。

#### [経世済民の思想]

世の中の秩序を保ち人々の苦しみを救う、という政治の理想を示したのが「経世済民」（「経国済民」ともいう）という言葉だ。江戸時代には多くの在野の政治思想家がいて、彼らは「経世家」と呼ばれていた。「経済」の語源にもなった言葉で、多くの日本人に親しまれてきた考えだ。

「済民」を政治家（君子）の大切な責任としていることは評価すべきことではあるが、民の側から見れば「済民」は「お上」の恵みとしてやってくるもの、ということになり、自ら主体的な努力や貢献を行うという発想は出てきにくい。何かにつけ問題が起これば「お上」の責任を追及するという発想は今でも日本の社会に根強いが、それは何も明治以後の産物というだけでなく、このような近世以来の思想に基づくものでもある。「上からのフィランソロピー」の発想である。

#### [分相応の思想]

身分や立場に相応しく振舞うことを「分相応」といい、ある意味で社会の安定した秩序を保つのに一定の役割を果たしている。この規範は、多くの人々が協力的に行うことを促すことにはなるが、特別の個性的な行為は抑制される。

慈善行為や篤志事業、寄付集めにおいても同様である。だれかが声をかければ、まず左右の仲間の行動を見て、参加か不参加を決め、分に応じた範囲で協力する。大切なのは「世間並」で、他人より突出した協力は必ずしも歓迎されない。むしろ、ひんしゅくを買う。そこで、何が分に相応であるかを定める機能が必要になる。企業寄付における経団連の役割がそれに当たる。ここでは高い志よりも平均的な意見が全体を支配する。これを「横並びのフィランソロピー」と呼ぶことができよう。

### ●それはいかに世界に通用するか

このような思想は、閉じた安定した社会では大変よく機能する。しかし近代西洋社会に端を発する開かれた社会においては、そのままでは通用しない。日本の経済活動が世界を巻き込むようになってしまった現在、このような日本人の心の深層を尊重しながらも、世界の人々が共感できるようなフィランソロピーの考え方を、今こそ私達は築いていかなければならない。

少し大袈裟に言えば、トヨタ財団のこの17年間の活動は、その試みへの挑戦であった。また、現在のフィランソロピー・ブーム、メセナ・ブームは、その新しい思想の誕生に向けての「陣痛の響き」なのかもしれない。

## 「在日福州地区華僑(華人)の中日文化交流への貢献」について 福建師範大学でシンポジウムを開催

唐文基 中国・福建師範大学歴史系教授

今回のシンポジウムは、1991年10月21、22両日、福建師範大学で開かれ、学長の朱鶴健教授と神戸華僑総会・林同春会長を顧問、副学長の林忠民教授を執行委員長に、約60名の代表が出席した。出席者には、中国社会科学院歴史研究所の林金樹副研究員、中国学術雑誌『歴史研究』の宋元強副編集長、廈門大学南洋研究所の李国梁教授、廈門大学歴史学部の顧海助教授、呉文華助教授など華僑研究の専門家、それに「第31回旅日福建同郷懇親会」への出席のため福州を訪れている在日華僑の代表20名も含まれている。

### ●変化した文化交流

朱鶴健学長と林同春会長が閉会の挨拶を述べた後、研究発表が行われた。私は「在日福州地区華僑(華人)の中日文化交流への貢献」(トヨタ財団研究助成)に関する発表で、次のように指摘した。福州地区出身の在日華僑一世が、中日文化交流の面では、主に民間宗教及び料理と理髪の技能という中国の大衆文化を日本に伝えた。しかし、1930年~40年代にかけての日本軍による侵略戦争の時期には、多くの華僑が虐待を受けたため、彼らによる中日文化交流は中断を余儀無くされた。戦後、特に中華人民共和国の成立と中日国交正常化以降、在日華僑の中日文化交流への貢献は新たな局面に入った。彼らによって日本に伝えられた中国の大衆文化は、粗雑なものから芸術性に富む一層緻密なものへと変わり、文化交流活動も従来の中国から日本へという一方通

行から、相互交流となっている。

### ●茶文化交流も

程鎮芳・福建師範大学教授は「中日茶文化交流」の発表で次のような事実を明らかにした。804年、留学の帰りに中国から茶の種を日本に持ちかえった最澄禪師は、中日茶文化交流の先駆者である。12世紀に浙江省で5年間の生活を終えた栄西禪師は、茶の種を持ちかえったのみならず、陸羽の『茶経』に習い、『喫茶養生記』を著し、茶の宣伝をしたため、日本の社会では「茶会」が開かれるほど茶を飲むことが流行になった。これにより、栄西禪師は日本の「茶祖」と呼ばれるようになった。「茶会」からさらに「茶道」が生まれた。日本の「茶道」は古代中国の「烹茶」と「品茶」の方法を取り入れた、独特の作法と儀式を持つ「茶会」である。近代になってから、中日間の茶文化交流が一層密接になり、福建省のウーロン茶と紅茶の加工方法が日本に伝えられたのに対し、現在では中国は日本から茶を加工するための機械設備を輸入している。

童家洲・福建師範大学助教授は「在日華僑(華人)の仏教信仰及びその特徴」についての発表で、長崎の四福寺の設立経緯及び唐寺は長崎華僑の四つの「幫」(華僑団体)の母胎であることを明らかにし、また隠元法師が日本で黄蘗宗を樹立したことと、これによる影響を述べた。さらに、日本華僑(華人)の宗教信仰には社団化、聖俗混合などの特徴があり、

中国僧侶の日本渡来は、中日文化交流を力強く推進したのみならず、在日華僑の日常礼儀作法にも大きな影響を与えたことも指摘した。

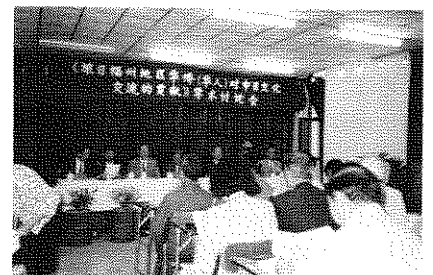
「中日文化交流の陰に」と題する発表では、前半で市川信愛・九州国際大学教授が在日華僑の特質を述べ、在日華僑に対する正しい認識及び華僑史の史実を風化させない必要性を強調した。後半の発表では蔣垂東氏が、「九州地方における福建出身華僑の職業変化及び中日文化交流への新たな貢献」についての調査結果を報告した。

中西啓・国立療養所長崎病院医師は、「華僑と日本の漢方薬膳」の発表で、日中漢方医学の交流史を概観し、特に近代における長崎華僑と長崎に伝わる薬膳の関係について報告した。

塚原ヒロ子・長崎明清楽保存会会員は「月琴(明清楽、南音)の伝承」の発表で、長崎に伝わる無形文化財である明清楽の源流及び、長崎在住の中国人→長崎市民→日本全国という明清楽の伝播経路などを明らかにした。

### ●有意義な学術研究

シンポジウムに出席した専門家からは各発表者の報告に対し、それぞれ意見と感想が述べられた。在日華僑の中日文化交流への貢献に関する研究は、有意義な学術研究であり、中日文化交流並びに両国の友好関係の促進にとっても意義深いことが参加者全員の共通認識であった。



## 環境をめぐる2つの報告会を開催

久須美雅昭 プログラム・オフィサー

環境問題に特效薬はありえない。多様な問題に対して地道にフィールド・ワークを積み重ねることが、結局いちばん大事なことであろう。昨年11月には、環境をめぐる2つの報告会が開催されたが、いずれも、フィールドワークへの参加の呼びかけを狙いとしたものであり、環境研究のひとつの方向ではないだろうか。

以下にその概要を紹介したい。

### ◆「アースウォッチ・セミナー」

—1991年11月12日、国際文化会館（東京・六本木）にて開催—

「アースウォッチ」は、1971年にアメリカ・ボストンに設立されたノン・プロフィットの組織で、世界各地に独立の支部をもち、生態学や地球科学、人間科学などのフィールドサイエンスに携わる世界中の研究者に資金の提供を行っている。

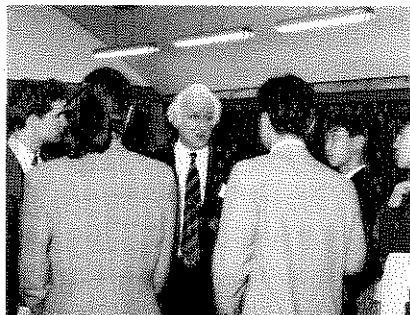
今回のセミナーは、「アースウォッチ・ヨーロッパ」が主催したもので、日本のフィールド研究の専門家や、自然保護や環境保護に関心のある市民に「アースウォッチ」の趣旨を説明し、活動への参加を呼びかけることが目的。日本側では旭硝子財団と当財団とが共同で参加者への案内や運営などの協力を行った。代表のブライアン・ウォーカー氏が自从来日し、紹介ビデオもまじえて約50名の出席者に活動内容の説明を行った。

アースウォッチの活動のユニークなところは、広く市民からボランティアを募り、専門家による様々なフィールド研究に助手として参加させることにある。この仕組みにより、研究者は労働力の提供も受け、参加する市民は第一線の研究プ

ロジェクトへの参画という得難い体験を得ることができる。このボランティアには弁護士やパイロットなど様々な専門職も参加しており、研究者にとってもボランティアとの共同作業が大きな刺激にもなっているという。日本ではまず例のないことだろう。

会場には、日本からボランティアで北欧の酸性雨のプロジェクトに参加した学生も来て体験談を語った。ウォーカー氏は、今後日本からもこの活動に参加する研究者が名乗りを上げることを期待している。

▼参加者の質問に答えるウォーカー氏(中央)



### ◆第30回研究報告会「身近な環境をみつめよう」

—1991年11月16日、お茶の水スクエア（東京・神田）にて開催—

「身近な環境をみつめよう」というのは、この10年余にわたって当財団が実施してきた研究コンクールのテーマである。文字どおり、身近な環境の問題について市民ひとりひとりの立場から研究に取り組んでみようという趣旨で、昨秋からは名称も「市民研究コンクール」と改め、第6回の公募を行ってきた。

この報告会は、今回の公募に合わせてこれまでのコンクールの成果の一部を紹介するとともに、「身近な環境と市民研究」というテーマで討論を行った。

最初に、当コンクールの紹介ビデオの上映、および、これまでの経過に関する

報告が財団側より行われた。次いで、基調報告として第3回で特別賞を受賞した「都市鳥研究会」代表の唐沢孝一氏から、8年にも及んだ同会の研究内容についてその一端が披露された。同氏は、これまでの研究の成果を集大成した「The Birds」(P.7参照)を出版したばかりでもあり、研究により明らかになった様々な都市鳥の生態が数多くのスライドを通して紹介された。

続く討論の部では、第6回選考委員長の日高敏隆氏による司会のもと、4人のパネリストによる発言とフロアもまじえての質疑・討論が行われた。小原秀雄氏は専門研究者として選考に携わった立場から、高野公男氏は都市計画の専門家であり、かつ、まちづくりの市民運動にも関わってきた立場から、蓮尾純子氏は第4回で最優秀賞を受賞した「行徳野鳥観察舎友の会」による活動の経験をもととして、また、村岡武司氏は第5回で最優秀賞となった「函館の色彩文化を考える会」の活動を背景として、それぞれの立場から、「身近な環境」への取り組みの重要性や「市民研究」のこれからの可能性などを語った。

ここでは論点のひとつひとつを紹介することはできないが、多様な試みが持続して行われるべきであるという点で、このコンクールの今後の展開への期待は共通したものであった。

▼討論風景



## 自然の重要性を改めて認識

三番瀬国際シンポジウムを開催して

寺田一哉 三番瀬研究会

### ●幅広く中身の濃い討論

昨年11月15日、“Tokyo Bay International Symposium on Urban marine Ecosystems: Preservation and Development of The Sanban-ze shoals” 「三番瀬・都市の中の自然海域 国際シンポジウム」—ポスト・ウォーターフロントを世界から—と題したシンポジウム（三番瀬フォーラム・三番瀬を21世紀に残す会と共催、トヨタ財団・日本自然保護協会後援）を、ホテルサンガーデンらぼーと（船橋市）において開催した。

都市に隣接する自然度の高い海岸の将来についてをテーマに、海外から3名、国内から5名の講演者を招き、150名余りの参加者を得、東京湾の状況から鳥や干潟の生物という生き物の世界とその管理、そしてアーバン・デザインという建築や法律的問題まで、海外での実例を交えながら非常に広い範囲におよぶ中身の濃い討論が展開された。

今回の主題である三番瀬は、東京湾奥の船橋市と市川市の沖合に位置し、江戸川（放水路）の河口に広がる干潟と浅瀬で、東京湾でも数少ない自然の海だ。かつては世界的な渡り鳥の渡来地であった「新浜」の名残でもあり、行徳野鳥観察舎のある行徳近郊緑地特別保全地区の前面に当たる。周りの埋め立て地からみると、まるで埋め残しの凹みのようになっている。

### ●多彩な報告

シンポジウムは、Kevin SHORT氏（海洋民族学者：シンポジウムのコーディネーター）と木村晋介氏（弁護士）の

司会で始まった。まず、風呂田利夫氏（東邦大学講師）が東京湾の現状及び三番瀬の生態系とその重要性について述べ、関根孝道氏（東京弁護士会：弁護士）が米国の環境法と比較しながら、三番瀬の保全のための日本の環境法について討論を行った。Timothy HENNESSEY氏（ロードアイランド州立大学教授）からは、三番瀬と同じようにワシントンという都市に隣接するチェサピーク湾の河口域管理に関する説明があり、米国が経験した失敗例をたどらず、その成果である現在の施策を参考にすべきであるとの助言があった。

また、関智文氏（東京弁護士会〔公害・環境委員会東京湾部会〕：弁護士）は、東京湾の自然環境を保全するための東京湾保全基本法試案の実現を主張した。昼食後、Richard BENDER氏（カリフォルニア州立大学バークレイ校教授）が、アーバン・デザインの立場から「氷原を渡る象のソリと犬ゾリの違い」をたとえにしながら、自然に優しい柔軟性に富んだウォーターフロント開発について述べた。蓮尾純子氏（千葉県立行徳野鳥観察舎）からは、三番瀬の後背湿地である行徳近郊緑地特別保全地区で行われている、地域住民による湿地再生の実験についての説明があった。Mark A. BRAZIL氏（鳥類学者）は、東京湾の歴史的な自然環境と、渡り鳥にとって日本の湿地帯がいかに重要であるかを述べた。最後に栗原康氏（東北大学名誉教授）が、干潟・塩性湿地の環境機能の評価と人間環境にとっての役割という観点より、三番瀬の将来計画の考慮点についてまとめを行った。

### ●三番瀬を実地見学

シンポジウムの前日には、海外からの講演者を中心に船で「海苔ひび」の浮かぶ三番瀬から京葉港、そして幕張メッセ

▼報告する風呂田氏



を回る現地見学を行った。これが非常に効果的で、講演のなかで三番瀬についての数多くの具体的な助言を受けることができた。海から見ると土地利用のあり方の不自然さがはっきりとわかり、講演者からは、自然海岸の保全の重要性が強く指摘された。また、日本の建築界でも有名なBENDER氏は、幕張メッセについて、建物のひとつひとつはともかく、全体での不調和を指摘していた。さらに、埋め立て地に室内スキー場を建設中と説明しても、海外の講演者たちには初めは何を言っているのかわからず、やっと理解しても信じられないという顔をしていたのは印象的だった。

### ●都市にも自然が欲しい

私たちのような小さな市民団体が、多数の参加者を得てこうした国際的なシンポジウムを開くことができたのは、時代が都市にも自然を欲し、ウォーターフロント開発という画一的な都市環境に拒絶反応を起こしかけていることの表れかもしれない。そして、このシンポジウムをきっかけに海外の講演者を中心とした三番瀬の国際応援団ができる見込みとなり、身近な特別ではない環境が、国際的な存在として評価されつつあることをうれしく思っている。

最後になるが、第5回研究コンクール・本研究の成果としての本シンポジウムに、再度支援いただいたトヨタ財団に感謝いたします。

## 助成財団資料センターの 最近の活動から

多数の助成財団の資料を集めて公開し、関連情報を広く発信することによって助成する側と助成を求める側の掛橋になること、このような目標を掲げてスタートした(財)助成財団資料センターも、任意団体としての設立から数えると、今年の11月で6年を迎えたことになる。

トヨタ財団はその設立と運営に惜しみない協力を続けてきたが、ここで昨春秋以来の活動を簡単に紹介しよう。

### ●「フィランソロピーの意義と役割」

をテーマに公開シンポジウムを開催

センターでは、毎年11月20日の設立記念日前後には「会員の集い」を開催しているが、昨年と同じ日に経団連会館(東京・大手町)で開催した。今回は、引続いて「フィランソロピーの意義と役割」をテーマに公開のシンポジウムも開催した。財団関係者、企業関係者、それに来日中の中国からの「基金会」関係者も含め、約150人が参加して熱心に耳を傾けていた。

シンポでは、まず最初に本間正明氏(大阪大学経済学部教授)が「公共経済学から見た民間助成財団の役割」について基調講演を行い、続いて5人の有識者によるパネル討論が行われた。

本間氏は、市場の失敗を是正するものとしてインディペンデント・セクターの重要性を説明し、このセクターの資金源としての民間財団の意義を語り、現在の日本の問題点を指摘した。

続く討論では、三谷誠一氏(三菱銀行国際財団専務理事、センター理事)の司会のもと、西村秀俊(朝日新聞社「アエラ」編集長)、佐藤豊(日本経済新聞社

編集委員)、C・A・又野・ヤン(日米教育委員会事務局長)、林雄二郎(東京情報大学学長、センター評議員)、高橋壽常(日本生命財団理事長、センター理事長)の各氏が、それぞれの立場から日本の財団の役割や課題について論じた。

時間的な制約はあったものの、フロアからの質問や本間氏の応答なども含め、日本の民間財団が抱える具体的な課題が浮かびあがったように思う。

### ●「日中における研究助成財団の現状と今後の方向」に関するセミナーも開催

翌21日には、国際文化会館(東京・六本木)で「日中助成財団セミナー」がもたれた。前述の中国国家自然科学基金委員会とその関係者を迎えてのもので、一昨年の東京での第1回、昨年の北京での第2回に続く3回目当たる。

午前中は、訪日団長でもある基金委員会秘書長の梁森氏の基調報告をはじめ、烏家驥(同委員会国際合作局長)、范元炳(同委員会地球科学部主任)、朱明権(浙江省自然科学基金委員会秘書長)の各氏から、国家自然科学基金委員会を始めとする中国の科学基金会の活動状況についての報告があった。科学基金会制度の歴史はまだ浅いが、着実に中国の科学界に根を下ろし、基礎研究に刺激を与えつつある様子が伺われた。

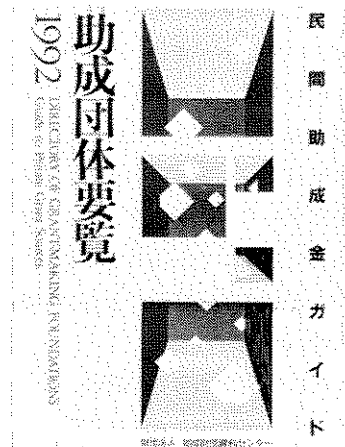
午後は、まず日中合作研究の事例として、現在実施中の「ヨウスコウカワイルカの保護に関する研究」について、神谷敏郎(筑波医療技術短大教授)と侯重儀(来日研究中の南京師範大学講師)の両氏から報告がなされた。このプロジェクトは、トヨタ財団と国家自然科学基金委員会の共同助成になるものである。

続いて訪日団側から、陳明哲(北京医科大学第三付属病院院長)、劉耕陶(中国医学科学院藥物研究所教授)、宗祥福(上海

復旦大学教授)の3氏が、それぞれの専門分野における最先端の研究状況を報告し、日本の研究者との共同研究の可能性や必要性について語った。すでに、多数の日中共同研究がさまざまな専門分野で進行していると思うが、中国側の期待はさらに大きい。民間財団としての一層の役割を考えさせられた。

### ●『助成団体要覧1992』の発行

センターでは設立以来、隔年で日本の助成財団のディレクトリーを発行してきた。昨年12月、その第3版にあたる『助成団体要覧1992—民間助成金ガイド』が出版になった。(B5版 600頁 定価4,500円[税込]、送料 360円。お問合せは、発売元の第一法規出版株式会社 ☎03-3404-2251まで)



収録内容は、昨年8月に行った各財団へのアンケート調査に基づくもので、民間助成財団を中心とした370を越える団体の概要が含まれる。各助成事業には、その事業分野と助成形態による分類がなされ、巻末にはその分野毎の索引が付されている。助成を求めている人のためだけでなく、現在活躍している財団がその事業を位置付ける上でも、新たに財団を設立しようとする人が事例を検討する上でも、有効に活用できるものであろう。

新刊紹介 .....

『Kamikaze Biker-Parody and Anomy in Affluent Japan』

佐藤郁哉・著

The University of Chicago Press・刊

A5判 287頁、8,450円(税込)

暴走族については、マスコミをはじめとし、一般的には非行の観点から過度に犯罪者としての存在を強調する傾向にある。しかし、実際の統計が示すところでも、彼等の生い立ちが不幸なものであるとか、その後に暴力団等へ結びつくということは必ずしも言えない。

こうした統計上の事実を無視するかのよう、研究者等は、暴走族の誕生を精神的な抑圧からの逃避等に求めたり、文化的な違いに起因するとしていたり、その受動的な側面のみに着目するのが主流である。また、能動的な視点が考慮されている理論も存在するが、その「遊び」という概念においての自発性は、制限を受けており不十分であるとしている。

本書では、こうした従来の理論に挑戦すべく、仮定として、人間の持ち合わせる相当な状況認識力および自由裁量権を認め、「遊び」のもつ、より能動的な視点からの理論を展開している。第一章においては「遊び」の観点から暴走族の実態に迫り、第二章では暴走族誕生からその展開過程の一般化を試みている。これらを統合しつつ、第三章では著者のここでの目的である「遊び」という観点からの暴走族の誕生の理論化を行っている。なお、本書は、1983年度の研究助成の成果にもとづきとりまとめられたものである。(K.T.)



『The Birds-鳥の目から見た都市文明』

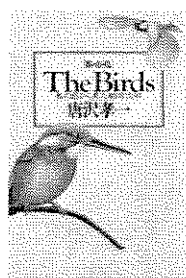
唐沢孝一・著

徳間書店・刊('91.10)

B6判 256頁、1,600円(税込)

本書は、著者が群馬県の恵まれた自然の中に育った中学時代から、現在、都立高校の生物の教師として教職の傍ら都市鳥研究の第一人者となるまでの、鳥との関わりをめぐる半生記ともいえる。

前半はひとりの少年の成長を描いた文学として、後半は鳥の生態をめぐる謎解きの過程を楽しませてくれる科学読み物として、そのふたつの面白さが、未だ少年の感性を失わない著者の巧みな語りによってみごとにブレンドされている。



特に、後半においては当財団の研究コンクールが、著者にとってどのような意味を持っていたのかが明らかにされるが、ここからも、財団とは助成を受ける人々によって育てられるものであるとの感慨をあらためて深くした。(M.K.)

『WORLD STUDIES』

サイモン・フィッシャー&デノヴィッツ・ヒックス・共著  
国際理解教育・資料情報センター・編訳

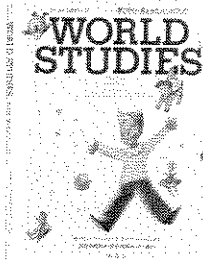
めこん・刊('91.10)

国際判 178頁 2,575円(税込)

よく言われることであるが、例えば、今朝食べた朝食のひとつを取り上げても、私たちの日常生活は世界の様々な地域と深く関わっていることがわかる。また、たった一つの地球の住人として、地球の未来なしに私たちの未来も存在し得ない。しかし、地球の未来を担う子どもたちに、地球社会で起きている様々な変化について、何をどのように教えるべきか、実際授業を行おうとすると、それはそう容易

なことでないことに気付く教師は多い。

この本は、こうした教師たちの問いに答える実践的な資料で、1985年にイギリスで刊行された「ワールド・スタディーズ」



の翻訳である。子どもたちが広い世界に目を向け、自分と世界との関係を考えるための授業案を80以上収めている。授業案はどれも基礎的な理解力・表現力を高め、他人に接する時の基本を身につけられるようになっている。

全巻、非常にやさしいタッチで写真やイラストがふんだんに使っている。そして、世界の人々の生き方や文化が、子どもの身近なこととして表現されている。また、本書は単なる実践書ではなく、なぜ国際理解教育が必要なのか、そしてその中身とは何なのか、といった基本的な教育理念についても明確に提示している。なお、本書の翻訳・出版には、当財団より1989年度の計画助成が行われた。(Y.H.)

『日本語・カンボジア語辞典』

峰岸真琴、ベン・セタリン・編著

めこん・刊('91.10)

A5判 411頁 3,090円(税込)

この辞書は、国立国語研究所が作成した「外国人のための基本語彙」に基づいて、日本語学習に必要な日本語の基礎語約7000語を収録する初めての日本語-カンボジア語辞書である。収録語彙の多くについては、用例も示されており、これを日本人のカンボジア語の専門家と在日カンボジア人の両著者が共同でカンボジア語に翻訳した。そこで、カンボジア語の文字の読み方を学習した日本人には、カンボジア語の作文にも役立つように工夫されている。

辞書作成に当たっては、日本語、欧文、カンボジア語が共存できるデスクトップ・パブリッシングのシステムを開発し、カンボジア文字のフォントのデザインから印字のソフトの開発も併せて行った。



現在、日本に住む約900人のカンボジア難民の人々は、切実に日本語学習を求めており、第一義的にはこれらの人々の為に本辞書は役立つものである。さらに、今後新生カンボジアと日本の関係が、急速に進むことが予想され、日本留学生など、カンボジア国内での日本語学習の需要は、一気に高まることも十分考えられる。当財団の助成により200部が買い上げられ、カンボジア国内の関係機関に寄贈されることになっている。(Y.H.)

#### 最近の報告書から

下記の報告書が印刷になりました。入手希望の方は送料分の切手を同封の上、当財団レポート係まで。

『アクセス食マップ イン・京都

ーぼくらは車いすのグルメ探偵団ー』

(障害者自立生活問題研究所・編・刊、B6判 48頁 '91.10、送料 175円)

これは、第4回研究コンクールで助成を受けた「しりたいクラブ」(京都)による「重度身体障害者の『食環境』に関する研究」のひとつの成果。研究チーム代表の谷口明広氏自身が障害を持つ身で、障害者にとっての「食」ということに切実な問題意識を抱いていたことが研究の

出発点になっている。研究を通じて得られた調査データそのものは多岐にわたるが、本書は其中でも、メンバー自身が「目と耳と胃袋」で確かめた、最も役に立つ情報を集約したものだ。

障害者がアクセス可能な外食店として、河原町近辺の18店舗が主なメニューと共に紹介されているが、おそらくは、こうした小さな試みひとつひとつが、「店自身の意識の変化に繋っていくことだろう。「街がぼくらの学校だ！」「子どもの遊びと街研究会」の活動の記録」(子どもの遊びと街研究会・編・刊、B5判 96頁 '91.11、送料260円)

子どもの遊びと街研究会は、1981年に公募を開始した当財団の第2回研究コンクールへの応募を契機に発足した。東京の三軒茶屋・太子堂地域を拠点として、コンクールの進行に合わせて精力的に調査・研究活動を展開し、予備研究の成果として「三世代遊び場マップ」を、続く本研究の成果として「三世代遊び場図鑑」をそれぞれ発表してきた。今では全国各地でこれにならったものが作られるようになってきており、まちづくり運動のひとつの手法として定着した感がある。同会は研究奨励特別賞を獲得し、その後も活動を継続したが、本書は'80年代の10年間にわたる会の活動の総括記録である。

太子堂をつむじ風のように駆け抜けたこの会もいまは解散し、メンバーもそれぞれに別のところで活躍している。本書を読むと、ひとつの生命体が使命を終え、自らの軌跡を遺伝情報として種子のなかに残していったような、そんな気がする。

『NGO開発協力ハンドブック-Oxfamの海外活動の経験から』(NGOアクション'90訳・編、日本国際ボランティアセンター・刊、B5判 165頁 '91.10、送料260円)

昨今、ODA(政府開発援助)や国連機関等による大規模な海外援助のありかたについての見直し気運が起きており、これに伴い、NGO(民間の活動団体)の活動に対する関心が増大している。しかし、日本のNGOは、欧米のそれと比較した場合、数はもとより、歴史や経験も乏しい。

本書は、1989年度の市民活動助成を受け、この種分野で世界的にも有名なOxfam(1942年設立。本部は英国・オックスフォード)によって出版された「The Field Directors' Handbook」の翻訳をベースに、作業グループ(NGOアクション'90)各自のNGO活動の経験を踏まえつつ、それをさらに要約したものである。Oxfamの長年の現場経験に立脚したNGOの現場活動に係わる計画、実施、評価に関する指針やノウハウなどが紹介されている他、巻末には「日本のNGO活動の課題と展望」と題する記述や団体リストも掲載されており、日本の関係者にとっての便宜に供する工夫が随所に施されている。

#### 編集後記

“バブル”がはじけ、景気も下降局面に入った1992年の日本。折角ともし始めたメセナやフィランソロピーの火を消すことのないよう関係者にはがんばってほしいところだ。本年もどうぞヨロシク。

## トヨタ財団レポート No.59

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛お申込みください。

発行日 1992年1月24日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 山口日出夫  
編集者 渡辺 元  
印刷 真友工藝株式会社